

令和 5 年 5 月 8 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02758

研究課題名(和文) 言語獲得理論に基づく小学校英語教育の高度化学習プログラムの開発

研究課題名(英文) Development Program for Enhancement of Elementary School English Education on the basis of Language Acquisition Theory

研究代表者

菅井 三実 (SUGAI, KAZUMI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：10252206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校英語教育において、より自然な形に近い英語を話すための学習プログラムを開発しようとするものである。本研究では、大きく2つの点に取り組んだ。

第1は、英語による会話をより自然に近いものにするため、フィラー表現を意図的に利用する試みである。結果、児童自身だけでなく指導者も学習の充実感を体験することができた。

第2は、学習者が自分の頭で考えた内容を英語で表現させようとするものである。日本語で短い原稿を作成した上で、携帯型自動翻訳機(ポケトーク)を用いて児童自身が直接英訳し、public speech に挑戦した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、そもそも、児童の発話する英語が何故「お芝居」のようになってしまうのかという素朴な疑問からスタートした。その要因として、(1)自然な会話であれば普通に見られるはずのフィラー表現が全くないことと、(2)発話の内容が、他人によって作られたもので、発話者自身の意図が含まれていないことを指摘した。本研究の成果として、(1)については、会話の中でフィラー表現を用いることによって話しやすくなるのは英語でも日本語(母語)でも変わるものではないことを児童に体験させることができた。また、(2)については、ポケトークを用いることで、自分が頭で考えたことを英語で話す体験をさせることができた。

研究成果の概要(英文)： This study is to be aimed to develop a learning program for speaking English in a more natural way in elementary school English classes. Two major points were addressed in this study.

The first is an attempt to intentionally use filler expressions to make English conversation more natural. As a result, not only the students themselves but also their teachers were able to experience a sense of learning enrichment.

The second attempt is to have students express in English what they were thinking in their minds. After writing a short manuscript in Japanese, the students were challenged to translate it directly into English using a portable automatic translator (PockeTalk) and speak in front of others.

研究分野：言語教育

キーワード：小学校英語 意図理解 フィラー 携帯型翻訳機 方略的能力

1. 研究開始当初の背景

本研究は、小学校英語教育の学習内容を高度化するための学習プログラムを開発しようとするものである。2020年度から小学校で英語教育が必修化されるにあたり、外国語活動よりも本格的な語学的学習を小学校レベルで実現するためのプログラムが必要になる。そこで本研究では、次の2つの問題点を取り上げることとした。

1つ目に、方略的能力という観点から見たとき、会話を始めるときや会話の途中で考え込んだときなどに用いる表現を指導されていない。したがって、与えられたシナリオ通りに話さないと会話が成立せず、児童は会話を修復する方略的能力を發揮できない状況にあった。

2つ目に、学校英語の口頭練習で、学習者は他人の書いたセリフを覚えて役割を演じるようになるため、児童は自分が言いたい内容を言う機会がほとんどない状況にあった。

これら2つの問題を克服するための学習プログラムを開発しようとするのが本研究の全体像である。

2. 研究の目的

上掲の2つの問題点に対応する形で、本研究では、それぞれ次の2つの目的を設定した。

目的1 英語による会話をより自然に近いものにするため、フィラー表現を意図的に利用できるようにする。

目的2 会話の練習が「お芝居」にならないようにするため、児童自身が頭で考えた内容を英語で話す体験をさせる。

2つの目的に対して、単にプログラムを設計するだけでなく、実際に小学校の授業の中で実践することによって、効果と改善点と検証するところを最終的な目的とするものである。

3. 研究の方法

2つの目的に対応する方法は、それぞれ次の通りである。ただし、2つの目的は排他的なものではなく、研究活動の中では部分的に重複する形で取り組むこととした。

第1は、学習者(児童)の現実の意図を含んだダイアログを作成し、フィラー表現と併せて練習を行うものである。英語の会話練習が機械的な「お芝居」になってしまう原因には、他人の書いたセリフを覚えて役割を演じなければならない不自然な場面設定があるという認識のもと、これを克服するため、実際のオンラインゲームを友人と楽しむ場面を設定した上で、Guess whatなどの定型句を用いて会話の開始時における方略的能力を活性化するとともに、フィラー(filler)としての Lemme see 等を導入することで、発話が詰まっても会話が停止しないようにした。結果、児童自身だけでなく指導者も学習の充実感を体験することができた。

第2は、児童自身が各自で作成したオリジナルの短い原稿を英訳し、1人ずつ自分だけの英語スピーチを披露するというものである。具体的には、「6年間を振り返って」というテーマを示して日本語で短い原稿を作成した上で、携帯型自動翻訳機(ポケトーク)を用いて児童自身が直接英訳し、そこに、近似カナ表記をつけることで public speech に挑戦した。この実践において、児童が発話した英語は児童自身が自ら作成した内容であり、児童は、(他人が作ったセリフ

ではなく)自分が本当に言おうとした内容を自力で英語にし、自分だけの英語でスピーチしたという成功体験を持つことができた。

4. 研究成果

第1の目的については、まず、英語のフレーズを導入するにあたり、日本語での会話を振り返ることから始めた。日本語での「えーと」のようなフレーズが不要でないことを踏まえ、英語でも同じように隙間を埋めるフレーズがあることを説明した。その上で、フィラーに相当する表現を教室では「隙間を埋めることば」と呼ぶこととし、日本語の表現を引き出しながら英語の表現を導入する形で、次のようなシナリオを提示した。

A: Guess what? (なあなあ)

Can you play Fortnite with me? (フォートナイト一緒にやろう)

B: Sure. Evening or night? (いいよ。夕方、それとも夜?)

A: Lemme see... Night, at 7. (えーと... 夜、7時)

B: I got it. (わかった)

このシナリオの練習において、当初予定していたフレーズの導入は、よく定着したように見られた。学習のポイントが明確だったということが奏功したものと思われる。

第2の目的について、一人ずつ教室の前方に出る形でスピーチ発表を行った。発表する児童は、自分で書いた原稿を基にした英語を読むことになるため完全に内容を理解しているが、他の児童は、英語を聞いただけで発表内容を理解することが難しいと思われることから、内容に関する画像をモニターに提示して、他の児童がスピーチを聞くときの理解の助けとした。



この写真は、中学校に入学して陸上部に入りたいという内容をスピーチしたもので、背後に陸上競技の写真を投影しているところである。このほか、趣味としての読書や音楽、将来就きたい職業としての医師や看護師、好きな食べ物、習い事などの画像を探し、背景として投影した。この経験を経て、「英語を学習すれば、こういうことができるようになる」という感覚を持てたという点で学習の効果はあったと考えている。

参考文献

菅井三実・伊藤なつ美(2021)「小学校英語におけるフィラーと没入体験の導入事例」『兵庫教育大学学校教育学研究』34, pp.15-21.

菅井三実・伊藤なつ美(2022)「小学校英語授業における携帯翻訳機を用いた英語スピーチ活動の試み」『兵庫教育大学学校教育学研究』35, pp.33-39.

Canale, M. and M. Swain (1980) Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*. 1(1):1-47.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 菅井 三実 伊藤 なつ美	4. 巻 34
2. 論文標題 小学校英語におけるフィラーと没入体験の導入事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 菅井 三実	4. 巻 1
2. 論文標題 言語獲得理論に基づく小学校英語教育の実践研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『認知言語学の最前線』ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 383-402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻幸夫	4. 巻 14
2. 論文標題 漢字仮名交じり表記法の認知科学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことはと文字	6. 最初と最後の頁 102-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 黒滝真理子	4. 巻 103
2. 論文標題 エビデンシャリティとモダリティ・アスペクトのインターフェース 「のだ」「ている」を例にして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 185-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒滝真理子	4. 巻 1
2. 論文標題 日英語のエビデンシャリティの理論的位置づけに関する覚書	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『認知言語学の未来に向けて』 開拓社	6. 最初と最後の頁 40-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木橋宏勇	4. 巻 1
2. 論文標題 用法基盤モデルに基づく英語ライティング教育 期待される情報と好まれる談話展開の涵養に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『認知言語学の最前線』 ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 361-383
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻幸夫	4. 巻 14
2. 論文標題 「漢字仮名交じり表記法の認知科学」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 102-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒滝真理子	4. 巻 103
2. 論文標題 エビデンシャリティとモダリティ・アスペクトのインターフェース 「のだ」「ている」を例にして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 185-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木橋宏勇	4. 巻 22
2. 論文標題 山岡政紀(編)『日本語配慮表現の原理と諸相』東京:くろしお出版,2019,pp. +254,ISBN:978-4-87424-815-7	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 109-117
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木橋宏勇ほか	4. 巻 7
2. 論文標題 オーラルアプローチを用いた英語授業 公立中学校における4技能の育成を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 杏林大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅井 三実 伊藤 なつ美	4. 巻 35
2. 論文標題 小学校英語授業における携帯翻訳機を用いた英語スピーチ活動の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Kazumi SUGAI
2. 発表標題 Languages as Reflections of Cultures, Open Systems, Perception, and Affordance: With Special Reference to the Japanese Language
3. 学会等名 Iaponica Brunensia 2021 (at Masaryk University, Czech Republic) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 八木橋宏勇
2. 発表標題 日英語談話研究と英語運用能力の熟達化 - 知識としての談話パターン、スキルを涵養する英語教育 -
3. 学会等名 英語の通時的及び共時的研究の会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 八木橋宏勇
2. 発表標題 メディアとことわざ
3. 学会等名 ことわざフォーラム2019（ことわざ学会ワークショップ）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八木橋宏勇
2. 発表標題 聖書の対照研究
3. 学会等名 第44回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 菅井 三実	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 208
3. 書名 社会につながる国語教室	

1. 著者名 菅井 三実、八木橋 宏勇	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 416
3. 書名 認知言語学の未来に向けて	

1. 著者名 多々良 直弘、松井 真人、八木橋 宏勇	4. 発行年 2022年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 176
3. 書名 実例で学ぶ英語学入門	

1. 著者名 Vyvyan Evans、辻 幸夫、黒滝 真理子、菅井 三実、村尾 治彦、野村 益寛、八木橋 宏勇	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 336
3. 書名 言語は本能か	

1. 著者名 辻 幸夫、楠見孝、菅井三実、野村益寛、堀江薫、吉村公宏	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 864
3. 書名 認知言語学大事典	

1. 著者名 米倉 よう子、菅井三実、八木橋宏勇ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 ことばから心へ	

1. 著者名 池上 嘉彦、山梨 正明、黒滝真理子ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 420
3. 書名 認知言語学	

1. 著者名 池上 嘉彦、山梨 正明、菅井三実ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 436
3. 書名 認知言語学 II	

1. 著者名 黒滝 真理子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 208
3. 書名 事態の捉え方と述語のかたち	

1. 著者名 森 雄一、八木橋宏勇ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 326
3. 書名 認知言語学を拓く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	辻 幸夫 (TSUJI YUKIO) (10207368)	慶應義塾大学・法学部(日吉)・名誉教授 (32612)	
研究分担者	黒滝 真理子 (KUROTAKI MARIKO) (20366529)	日本大学・法学部・教授 (32665)	
研究分担者	八木橋 宏勇 (YAGIHASHI HIROTOSHI) (40453526)	杏林大学・外国語学部・准教授 (32610)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------